構成美の追求

髙木茂行（聖雨）
Shigeyuki（Seiu）Takaki

金文二字による作品制作で重要となる要素はいくつかありますが、この作で特に留意したのは、文字の重心を低く落とし、紙面上部に広く余白をとることでした。冠毛をもつ鳥を表す「雚」は冠毛の部分を大胆に伸ばし、「吳」は矢と口の間隔を広くとることによって、紙面上部に明るさと広がりを持たせようと試みました。また上部の余白を引き立たせるため、「亻」は旁と密着させ、「女」は縦形にすることで下部全体を引き締め、上部との対比を狙いました。

構成上、その他考慮した点は、三つある口に潤渇、筆法、角度の変化をつけ、単調さを避けることでした。「雚」の二つの口は角度を文字の中心に傾け、求心力を持たせ冠毛部分の伸びを強調させるようにし、「吳」の口は余白を際立たせるため、墨量を多めに力強く堂々と書きました。

包世臣が鄧石如の「字画の疏なる処は以て馬を走らすべく、密なる処は風をも透らしめず、常に白を計りて以て黒を当つれば、奇趣乃ち出づ。」という書についての考え方に影響を受けたことはよく知られていますが、金文を用いた少字数作品に関しても同様のことがいえると思います。この作では前述した通り、疏密の対比を念頭に大胆な余白の配置を試み、また線に肥瘦の差はあまりつけず、潤筆と渇筆、運筆の遅速によって動きを出すことを意識しました。

これまで蓄積してきた技術と自己の感性を基に作品制作に臨みましたが、理想には程遠いものとなってしまいました。作品の構成は様々な要素から成り立っていますが、どの要素をとっても一朝一夕に会得することはできません。今後とも益々精進せねばならないと思っております。

○釈文　　懽娛…よろこびたのしむ。
○用具・用材　　筆…兼毫筆、紙…台湾画仙、墨…墨液
○寸法　　六九cm×一二〇cm

懽娛　　69×120